

# 『もう一度!』と思って、落選の翌日から活動を再開しました」

牧島かれん(36歳)

自民党・元客員教授

Karen Makishima

1976年生まれ、神奈川県出身。国際基督教大学教養学部卒業後、米ジョージ・ワシントン大学ポリティカル・マネジメント大学院修了。前職は、横浜薬科大学客員教授(国際行政学)。「政治は地味で、地道な仕事です。淡々とコツコツと丁寧な仕事の積み重ねが一番大事だと思っています」。

「アメリカでは『子どもたちが大統領を目指さなくなったら、アメリカは終わる』と言われています。これは、アメリカだけでなくどの国でも同じ。でも今の日本では、残念ながら政治家になりたいという子どもたちはほとんどいない。それは政治が不信感を持たれているから。私の集会には子どもたちにも参加してもらって、なるべく政治に関心を持ってもらうようにしています。この現状を少しずつでもいいから変えていきたいんです」

身長155センチと小柄。だが「カラダは丈夫。ケガひとつしないし、風邪もひかない」という通り、話しているときとてもパワフルな印象を受ける。

父は現職の神奈川県議。子どものころから政治は身近なものだった。

「実家と事務所が一緒だったので、いろんな人が集まって知恵を出して、町を元気にするための答えを出すプロセスを見ていました。すごく夢があるし、責任の重い仕事だなと感じていました」

2009年、河野洋平の後継指名を受け、神奈川17区から立候補するも落選。

「最初のときも自信はあったんです。当時は自民党に逆風が吹いていましたけど、手応えもあったし、何とかなるんじゃないかと思っていました。でも結果は力不足で落選。正直、落ち込みましたけど、1年弱の活動で10万5000人以上の支持を得られた。応援している人の後押しもあったし、『もう一度!』と思って、落選の翌日から活動を再開しました」

政治家に休日はない。24時間365日スタンバイしていなければならない。それは父を見て学んだ心構えであり、覚悟だった。それが実り、今回見事に雪辱を果たした。

「私は『人づくり』をテーマに活動を行っていきたいと考えています。この国の最大の資源は、いつの時代も“人”。現在、景気回復策を行っていて、効果は出てくると思います。でもいざ景気がよくなっても、人材がいなければ意味がない。もちろん政治に

も人材が必要。女性の政治家も増えたほうがいい。気持ちのある人がいれば、私も応援したいです」

現在は、事務所スタッフと選挙区内でシェアハウスして暮らしている。

「結婚願望はあります。先輩議員のなかにも結婚して、子育てしてというロールモデルが増えているので、あとを追いたいと思っています。結婚相手にそれほどこだわりはないんですが、こればかりは相手があることだから……」

## FASHION CHECK

ジャケットはZARA、ワンピースはH&M。「洋服は好きなんですが、買いに行く時間がなくて母に買ってきてもらいます」

## MY OPINION

**原発問題** 脱原発への道筋に技術革新は不可欠。代替エネルギーとしてリチウム蓄電の進化が求められており、新産業の構築を目指します。

**消費税率** 株高・円安・デフレ脱却がどこまで可能か見極めたくうえで、将来のための増税を認知できる環境を創り上げることが肝要。

**アベノミクス** 豊かさを実感できるかが鍵。数値上でデフレを脱却しても収入が変わらず、雇用が拡大しなければ立て直しにはなりません。

**TPP参加交渉** 視点を変えてみる必要があります。日本が参加しないTPPを米国はどう評価するのか、各国の立場を考察し解を求めるべき。

**尖閣・竹島問題** 日本固有の領土であり、グローバルな発信が必要。訪中、訪韓特使や政治家によって道を誤ることがあってはなりません。

**被災地復興策** いかに実行するかが大切。まずは政府と地方の信頼関係の再構築から始め、復興庁の被災地移転なども検討すべきです。